

小学生の頃に見た映画「グリーンマイル」を取り上げたい。物語は、大恐慌時代、アメリカ南部の刑務所で死刑囚舎の看守主任を務めていた主人公ポールの回想形式で綴られていく。双子の少女を殺した罪で、ポールの元へ送られて来たジョン・コーフィ。いかつい外見とは裏腹に子供のように純粋な心を持つ彼は、持てる不思議な力でポールの病を治し、死の影が宿るグリーンマイルを奇跡の光で満たしていく。まるで神様の贈り物のようなこの男が、本当に罪を犯したのか？疑問にかられるポールと、仲間の看守たち。やがて真実を知った彼らは、自分自身の果たすべき義務と、人間としてなすべき正しさのあいだで、激しい葛藤を強いられることになる。観客は皆「コーフィは冤罪なんだからきっと助けられるはずだ」と思ったはずである。ご多分に洩れず私もそう思えてならなかった。しかし、彼は結局電気椅子へ…

私はある意味でこの物語は成長物語の挫折ではないかと思う。コーフィは神の使いであり世界を幸せで溢れることを夢見て人間世界にやってきたのだが、人間のあまりの残忍さ・強欲さ・エゴイズムを目にし、人間世界に絶望してしまった。無垢な彼の心は散々なまでに痛めつけられ、今回のあまりに残酷な殺人事件の目撃…それが彼の心の決定打となったようだ。社会を笑顔で溢れさせることを諦めてしまう。実際、ポール達に事件の真実を伝えた後彼はこう述べている。「俺はもう疲れたんだ。人間の色々な面を見てきたが、もう疲れたんだ。悪い面を見すぎた。もう、帰って休みたい…」

私達観客は、彼がポール達に救われ、また笑顔で溢れた世界を夢見て生きていくのだろう。誰もがそう思った。しかし、彼自身でそれを閉ざしてしまった。そして、晴れて社会に受け入れられる形で大衆の目に晒される「予定通りの」成長物語とは裏腹に、死刑囚として、社会に忌み嫌われるもの・憎悪の象徴として晒されてしまった。私にはこれが成長物語を意識した逆説のように思えてならない。成長物語のように、社会に受け入れられるべき人物が、忌み嫌われる象徴として人々の目に晒される…言葉足らずで完全な表現は出来ないが、悲しき成長物語の逆説を孕み、それは一言で「挫折」と言えるのではないだろうか。

グリーンマイルではもう一つの側面が描かれていることにも触れておきたい。「黒人差別」である。コーフィの登場シーンではかなりの悪者のような描写となり、かつ汚らしいオーラを表現していた。そして電気椅子での処刑シーンである。白人だらけの観衆の目に晒されながら、嫌と言うほど罵倒されるコーフィ。震えているコーフィはこれから迫り来る死に震えているのではない。白人の残忍な殺気ある目に震えているのだ。大勢の白人対一人の黒人というこの構造、そしてこれからその一人の黒人を残忍な方法で処刑し、白人の観衆の目に晒すという背景。裏に黒人排斥の構図が見えてはこないだろうか。

大勢の白人の憎しみに満ちた目に晒され、電気椅子で無残な死を遂げた憐れな黒人コーフィの首には、神の象徴、キリストのネックレスがコーフィの黒い肌に際立って、輝いていた。